

医療とケアを問い直す、 てつがくカフェ、 はじめています。



「てつがくカフェ (café philosophique)」とは、わたしたちが通常当たり前だと思っている事柄からいったん身を引き離し、「そもそもそれって何なのか」といった遡行的な問い(哲学的な問い)を投げかけ、ゆっくりとお茶を飲みながら、他の参加者との〈対話〉をとおして自分自身の考えを逞しくすることの難しさや楽しさを体験するものです。1990年代に、フランスの哲学者マルク・ソーテが、パリのバステュー広場にあるカフェで始めたのがきっかけとされています。

医療やケアの現場は、脳死からの臓器移植、安楽死・尊厳死、死の自己決定(権)などといった〈死〉を取り巻く場面で突き付けられる哲学的な諸問題にはじまり、出生前診断や遺伝子診断の是非、重症新生児の治療の差し控え・停止、胎児細胞の治療研究への利用、さらには体外受精や代理母といった〈誕生〉の場面でも私たちに多くの問いを投げかけます。また〈ケア〉においても、障害者への支援や介護、看取りなど他者の生活を支える営みの複雑さ、境界の曖昧さからくる様々な問題が横たわっています。そこでは、みずからの死生観をはじめ、人間観、宗教観など、様々な価値観の問い直しが迫られ、試されることとなります。そういった点からすれば、いま、医学・医療(ケア)の現場では小手先の対応では到底解決できそうもない根本的な問いかけ、すなわち哲学的な思考が求められていると言っても過言ではありません。こうした課題に対して、「哲学対話(てつがくカフェ)」という営みを通して一緒に考えてみませんか? 今回は、「〈看取る〉とは?」をテーマに、参加者の皆さんとともに考えます。哲学の知識は一切必要ありません。どなたでも自由にご参加いただけます。

テーマ:「〈看取る〉とは何か?」

わたしたちは、〈看取り〉と聞くと大切な人に囲まれ、見守られながら死んでいくことを想像します。しかし、医療技術の発展や社会構成の劇的な変化などにもない、いまでは、〈看取り〉の場所が亡くなる人にとっての〈寛げる場所〉から〈無機質な病室〉へとシフトしつつあるように感じます。そこでは、〈看取り〉という営みが、看取る側にとっても看取られる側にとっても、ともに豊かな営みとしては機能してはいないかのようにすら感じます。どのように看取り、またどのように看取られるのがよいのか(望ましいのか)。このことは、現代の医療においては極めて重要な課題と言えます。

今回は、前回の対話(「人間らしく死ぬとは」)から派生した「看取る」というキーワードを改めてテーマとして設定し、人間の死、人間らしい死の在り方について、さらに別の角度から考えを深めてみたいと思います。

渡邊ゆうき(福井大学医学部医学科2年)



- ◆ 実施日:12月18日(日)
- ◆ 時間:13時00分~15時30分
- ◆ 場所:大学連携センター「Fスクエア」

福井駅東口を出てすぐ。アオッサ7階

参加無料、事前申し込み不要。

どなたでもご参加いただけます(途中退出も可能です)。

ファシリテータ:西村高宏(福井大学医学部准教授)

ファシリテーション・グラフィック:近田真美子

(東北福祉大学健康科学部講師)

主催:てつがくカフェ「医療とケアを問い直す」(福井大学地域貢献事業)

共催:福井大学医学部附属教育支援センター

問い合わせ先:tanishi@u-fukui.ac.jp(西村)